



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

イスラエル・パレスチナ：ガザ停戦の危うさ

ガザ地上戦が始まってから3週間目の8月5日、イスラエルとハマースは、ようやく72時間の停戦に入った。エジプトの仲介を経て、この停戦を受け入れた両者に対し、米国ほか国際社会は、この停戦を恒久的なガザの和平確立に結びつけるよう、関係者の引き続きの努力が必要であると呼びかけている。

こうした動きを背景に、既にカイロには、ハマース及びイスラム聖戦などを含むパレスチナ側の代表団が到着していると言われ、イスラエルも5日、代表をカイロに派遣したと報じられている。予定される交渉は、当事者が同じテーブルについて直接交渉を行うのではなく、エジプトを介する間接交渉の形をとる、とも伝えられる。

今回の72時間停戦に入るのに先立って、イスラエルは、ハマースがガザに敷設した30本以上のトンネルの大半を破壊し、ガザ攻撃の目的をほぼ達したとして、地上軍の撤退を開始した。それに先立って、エジプト、米国などからも数次の停戦提案がなされた。だがイスラエルはハマースの対応にまったく信を置かないため、停戦交渉に入ることなく、自ら構築した安全保障措置の基礎に基づいた一方的な行動として兵を引き揚げ始めていた。

この72時間停戦の動き自体は、ガザの情勢に一縷の光を射すもののように見えるが、イスラエル及びハマースが求める基本的な事態の改善の内容には大きな差がある。従って、この極めて危うい停戦状態が、いつ崩れ去って再び暴力の応酬に陥るか予断を許さない状況が続いている。

評価

今回の時限付き停戦に入るに当たって、上記のとおり、米国などから恒久的和平の枠組み構築につながるよう努力がなされるべきだ、との国際社会の呼びかけはあるが、ガザの実態はその状態からかけ離れたところにある。

イスラエル側は、地下トンネルの破壊により今回の攻撃目標をおおむね達成した、としている。しかし、イスラエルが中長期的に求めているガザの状態は、当然それに止まらない。それは、ガザの更なる基本的変革であって、そのうち特に重要なものが、ハマースの非武装化である。その中には、当然、既に設置された数千発のロケット砲とその発射台の破壊も含まれている。この非武装化を実現するテコとして、ガザがイスラエルに対する恒常的な攻撃基地でなくなることを確保するため、パレスチナ自治政府にガザの治安維持の役割を担わせることが選択肢の一つとなり得る。

ハマースが、こうしたイスラエルの要求に応ずる可能性は極めて低い。そのみならず、ハマースが求めている最も重要な条件の一つは、イスラエルによるガザへの経済封鎖の緩和であり、更にはイスラエルにおけるパレスチナ受刑者の釈放である。ハマースとしては、こうした

要求が目に見える形で満たされること無しに、イスラエルに対する暴力的手段の行使をあきらめることは出来ないであろう。特に今回のガザ戦闘では、1800人以上の死者や多数の負傷者を出している。それにも関わらず、イスラエル側から見るべき譲歩を引き出すことなく、このまま戦闘停止をズルズルと続けることは、ハマースの存在意義そのものを揺るがしかねない状況であり、それに耐えるのは日を追って難しくなっていく。

このようなイスラエル、ハマースの要求次元の大きな隔たりもさることながら、今回の困難さは、有力な仲介者の不在から来ている。7月下旬には、トルコとカタールによる仲介の動きも見られた。その動きは、当初、両国のハマースに対する実質的影響力に期待した米国の支援も得て、7月26日の米、英、仏、独といった欧州諸国も交えたパリ会合の開催につながった。だが、そのようなトルコ、カタール主導の動きは、イスラエル、エジプトおよびパレスチナ自治政府の反発にあって、ほとんどまともな動きも示さないうちに頓挫してしまった。それに変わって動き出したのが、当初の停戦案を示したエジプトによる再度の仲介である。国内でムスリム同胞団を排斥してきたエジプトが、冷却化した関係にあるハマースにどの程度の影響力を及ぼし得るかは、大きな未知数である。だが、ハマースとしては、犠牲者が増え続け、経済状態も悪化を続けるガザの現状を背景に、自らの打開策を持たない状態の中で、エジプトの介入を受け入れざるを得ない状況に追い込まれていたと見られる。イスラエルが今後、どこまで妥協的姿勢を示すか注目されよう。

(鏡副理事長)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799